

認知言語学の知見を生かした英語教育の実践に向けて

花崎 一夫

キーワード：多義語 放射状カテゴリー 認知言語学 生成文法 英語教育

1. はじめに

20世紀の半ばを過ぎたあたりから、ノーム・チョムスキーが唱導する変形生成文法（以下、生成文法）が台頭し、俄に注目を集めるようになった。この枠組みでは、単に個別言語の文法を正確に記述すればよしとするのではなく、人間の言語能力の解明を目指していた。人間が、一生の比較的早い時期、遅くとも10代の前半には母語の文法をほぼ完全に身に付けることから、無限の文を生成できるような有限個の規則を習得しているのではないかと考えた。その規則の定式化こそ言語学の取り組むべき課題であると考えたわけである。この規則を運用して文を生成するのは人間である我々であるが、生成文法では、その人間を理想的な話し手兼聞き手、すなわち運用に際して決して過ちをおかさない人間であると捉え、事実上、生身の人間を捨象する方針をとった。したがって、人間が文を生成するのではなく、規則が文を生成するとみなしたわけである。そして実際の文の生成は、統語的な規則に従ったものであると捉えている。さらに文の意味と構造は独立したものである、すなわち意味はレキシコンのなかに存在するもので、文の構造とは独立したものであると考えたわけである。したがって、語の意味を考えるとときには、それはあらかじめレキシコンに記載されているものであるので、いわばアプリアリに与えられているとして、研究対象の中心からは外される運命をたどった。本稿で取り上げる多義語の意味に関しても、この枠組みでは、どうして多義になったのかという考察は当然しないことになる。これでは第二言語としての英語教育を考えたときには、生成文法はまったく役にたたないと言わざるをえない。¹ 一方、従来の高校までの英語教育において多義語のもつ意味について教えるとなると、英和辞典の記述を援用しての指導が主流だったように思われる。しかし、その記述を見てみると、英語学習者には理解しやすいとは決して言えないことがわかる。そこで、英語教育に寄与しうる言語理論が必要になるわけだが、意味と構造を不可分なものとして捉えるという基本方針を採用している認知言語学が有力候補として登場するということになる。² 本稿では、認知言語学の基本的な概念である「放射状カテゴリー」をとりあげ、それを援用して語の多義性を説明する英語教育の可能性について、従来、高校までの英語教育でしばしば活用されている、英和辞典を援用した多義語の説明と比較しながら、具体例をあげて論じることとする。³

2. 英和辞典を用いた語の多義性の解説と英文和訳テストの分析

このセクションでは、多義語の代表例である英語の「thread」という動詞の英和辞典の記述を紹介し、その問題点を考察すると共に、辞書の記述を学生に見せたのちに提示した3つの英文を和訳させるという作業を通して見えてきた問題点についても考察する。

まずは、筆者が信州大学の英語の授業4クラス（約120名対象）において行なった「thread」に関する英和辞典を援用した解説とテストを紹介することとする。以下の引用（1）は、筆者が、英文和訳問題に先立って学生に提供したジーニアス英和大辞典に掲載されている動詞の意味の定義と英文和訳問題である。

（1）問1 以下は、ジーニアス英和大辞典に掲載されている「thread」の定義である。

動詞 他（他動詞） 1 <人が><針に>糸を通す；...に[...を]突き通す[with], ...を[...に]突き通す[through]；<ビーズなど>を糸でつなぐ(together), ...に糸を通す；...を糸で[糸をつかったように]織り合わせる

2 <悲しみなどが>...にゆきわたっている；...に[...で]しまをつける[with]

3 <街路・人ごみなどを>縫うように進む[通り抜ける]

自（自動詞） 1 [...を]縫うように通る[across, along, through]

2 <シロップが>煮詰まって糸を引く

3 <川などが>曲がりくねって続く

この定義を参考にし、以下の3つの英文を日本語に訳しなさい。辞書を使っても構いません。

1. He managed to thread a right-foot shot through a crowded penalty area into the bottom corner. (Heはサッカーのプレイヤーを指す)

2. The ship threaded her way through the hidden rocks.

3. A joyous quality threaded the whole symphony.

まず辞書の定義において指摘しなければならない問題点は、他動詞の用法の1における記述からわかるように、「thread」が目的語を取る場合には2つのパターン、すなわち典型的には「糸」が目的語になる場合と、「針」すなわち「糸」を通すものが典型的な目的語になる場合の2種類が一つの項目の中に混在していることである。したがって、この記述を見て用法を整理する場合に、学習者が混乱してしまう恐れが十分に考えられる。また、他動詞の用法1と2, 3の関連性が辞書の記述からは明確に理解することが困難になっている。したがって、他動詞の用法のすべてを理解しようと思うと、それぞれの用法を個別に理解し、記憶する必要が生じてしまうのである。そうになると、学習者にとっては、多義語の学習は、記憶という面で非常に負荷がかかることになり、結果として用法のすべてを身につけることが難しくなることが予想される。このことを裏付ける意味で、学生に課した英文和訳の小テストの結果を次に見てみることにする。全体的に言える傾向としては、上記の和訳問題のうち、2が一番正解率が高く、90%以上の学生が正しく訳せていた。その次に正解率が高かった問題は1であるが、正解率は70%程度に落ちてしまった。原因を考えてみると、1の場合の目的語が「shot」すなわち「シュート」であるために、1の用法における典型的な目的語ではなく、辞書の定義では1の用法に当たるにもかかわらず、それとは気がつかず、結果的にうまく訳せなかったのではないかと考えられる。そして、もっとも正解率が低かったのが3の問題で、正解率は60%ほどであった。この例文は、辞書の定義では2の用法に該当するので比較的わかりやすいと予測をしていたのであるが、かなり文自体の意味が抽象的だったことが正解率が低くなった原因の一つだと言えるのではないと思われる。実はこの用法も、辞書の1の用法の拡張用法であると認知言語学的な見地からは言えるのであるが、そのことは辞書の記述からは察知することが難しく、当然、英語学習者である大学生も、この事実には気がつかず、結果としてうまく訳せなかったのではないだろうか。以上、簡単に英和辞典の記述を援用した多義語の解説の問題点について考察した。次のセクションでは、辞書記述の問題点を克服しようとするような、「放射状カテゴリー」という考え方を援用した多義語の教育方法について取り上げることにする。

3. 「放射状カテゴリー」という概念を援用した多義語の教育方法

このセクションでは、認知言語学の基本概念である「放射状カテゴリー」について、Lakoff (1987) の分析を紹介して概観したのち、この概念を援用した「thread」の意味分析を提示する。

3. 1. Lakoff (1987)

Lakoff(1987)は、プロトタイプ理論を応用した意味分析を行っており、それによれば、多義語の中には、それがもっている様々な意味がお互いに関連を持ちながら放射状カテゴリーを形成しているものもあると考えている。以下、Lakoff自身が挙げている「mother」の例で説明したい。典型的な「mother」の定義は、生まれてこのかた女性であり、子供を生み、子供の遺伝子のうち半分を自分が与え、子供を養育し、子供の父親に当たる男性と結婚しており、子供の世代より一世代上で、子供の法律上の保護者である。しかし、この意味以外にも英語圏には、stepmother(継母)、adoptive mother(養母)、birth mother(生母)、foster mother(里子の母)、surrogate mother(代理母)などの概念が存在する。これらの下位カテゴリーは、すべて中心的な場合からの逸脱であると理解されているが、習慣上、中心的な場合に変化を加えたものとして規定されているに過ぎない。つまり、母親の種類を生成する一般的な規則はなく、どんな種類の母親があるかは、文化ごとに規定されているのであって、それらは習い覚えなければならないものであり、この「mother」というカテゴリーの意味構造は、中心義が中央にあり、周辺に行くに従って、それに変化を加えて習慣化された変異体の意味が分布するというような構造、すなわち「放射状カテゴリー」をなしていると考えたわけである。次に、この考え方を応用した動詞の多義性についての指導及び学習モデルを考察したい。

3. 2. 「放射状カテゴリー」を援用した多義語の指導・学習モデル

このセクションでは、筆者が実際に信州大学の英語の授業において「thread」の多義性について解説したときに使用したパワーポイントの資料(2)を紹介し、その特徴と利点について考察を加えた後、解説後に実施した英文和訳のテストの結果についても概観する。まずはパワーポイントの資料(2)を見て欲しい。

(2)



3つの用法

その1 他動詞の用法A→cotton(糸)すなわち針に通すものが典型的な目的語

Threading the cotton through→細い糸を何か(典型的には針)に通すイメージ

↓

Threading the ball through→この場合は、ボール、すなわちパスを狭い領域に通すイメージ

例:threading a shot to the left corner (シュートを左隅に決める)

↓

Thread one's way through the crowd→wayが目的語に来ると、群衆の間の道を縫うように進んで行くという意味。これも細い糸が何かを通っていくイメージが比喩的に拡大したものと考えられる。

↓

Threading its way through (fictive motion)

例:The deep fierce pain threaded its way up toward my throat. (激しい痛みが喉にこみ上げてきた。)これは何かが実際に移動しているわけではないことに注意。

その2 他動詞の用法B→needleすなわち典型的には糸が通される対象が目的語になっている場合。

Thread a needle for me. (針に糸を通してくれ。)

↓

thread a hundred beads (100個のビーズに糸を通す)

↓

A joyous quality threaded the whole symphony. (交響曲全体に喜びが流れていた。) to pass continuously through the whole course of (something); pervade

その3 自動詞の用法

Threading through (literal)→なし！

↓

Threading through a minefield (地雷原を糸を縫うように進んでいく)

↓

Threading through the hills (fictive motion)

↓

Threading through the story

この資料に特徴的なことは、基本的に「thread」には中心的な用法が3つあり、それぞれの用法の中で、より中心的なものから周辺的な用法へ意味の拡張が起こっている、すなわち「放射状カテゴリー」を形成していることを示している点である。例えば、用法のその1では、「糸」が目的語になる場合を中心義に据え、そこから「糸」に代わるものとして「ボール」、さらには「道」がくる場合を例文とともに提示し、互いに関連しつつ意味の拡張がおこっていることを実証している。さらには、実際の動きがないような fictive motion (想像上の動き)がある、**The deep fierce pain threaded its way up toward my throat.**(激しい痛みが喉にこみ上げてきた。)のような例を提示している。こうすることで、一見、単独では抽象的で理解が難しいと思われるような文も、基本的な用法からの拡張と捉えることで、英語学習者にとって理解しやすいものとなっているわけである。次に、その2として、典型的には「糸が通される対象」すなわち「針」が目的語に来る場合を中心義に据え、最終的には **A joyous quality threaded the whole symphony.** (交響曲全体に喜びが流れていた。)のような、一見「針」とは関連性がないようなものが目的語に来る場合に対しても、典型的な用法と関連付けた説明を与えている。英和辞典の記述と比較してみても、その1とその2に用法を分けたことによって、学習者に混乱を与えにくくなっている点が利点として挙げられるであろう。⁴ そこで、このアプローチによる多義性の指導が優れていることを示すためにも、この解説を加えたのちに学習者にやらせた英文和訳の問題とその結果について考察したい。実際にやらせた和訳の問題は(3)のとおりであり、用法的にも、英和辞典の記述を提示した後に学生に与えた問題と同じになるように配慮した。⁵

(3) 問2 授業中のパワーポイントによる説明を聞いたのちに以下の英文を訳しなさい。

1. He threaded the ball to the striker.

2. They threaded their way along the crowded sidewalk.

3. The chance of hunger and poverty threaded their lives with anxiety.

解説後のテストにおいても、3つの問題の中で比較すると、1, 2の問題における正解率が3の問題と比較して高かった点については、辞書の定義を提示したあとのテストと比べても同様であった。ただ、今回は1, 2においては90%以上の学生が正しく訳せていたので、正解率自体には有意差が見られた。また、3の抽象的な意味の用例においても、80%近くの学生がほぼ正しく和訳ができていた。実際に授業の中で学生に聞いてみたところ、正解した学生の中には、3の用例が解説のパワーポイントのその2の用例であることが理解できたために訳出することができたと言っていた学生もいた。このことから、動詞の多義性を「放射状カテゴリー」という概念を用いて解説することは、第2言語としての英語教育に大いに資するところがあると証明できたと言えるであろう。

4. まとめ

本稿では、英語教育に資する言語学分野として、生成文法には限界があることを指摘し、生成文法に代わる認知言語学の有用性を指摘した。とりわけ、英語の多義語の教育においては、認知言語学の中で指摘されている重要概念である「放射状カテゴリー」を援用した説明モデルが有効であることを、「thread」を具体例に出して示した。さらには学生に英文和訳の課題を、「thread」の多義性について解説した後に与え、そ

の効果を検証した。結果は、解説前と解説後の学生の理解度には有意差が見られることが示された。⁶ 以上のことから、認知言語学の知見を活用した英語教育は非常に効果が認められることが実証されたと言えるであろう。今後も動詞の多義性のみならず、認知言語学を活用した英語教育を、大学レベルでの英語教育で実践していくことが大変意義のあることであると言えるであろう。

注

¹ 生成文法の抱える様々な問題点については、花崎（2010）を参照されたい。

² 認知言語学そのものについては Langacker(2008)で詳しく議論されているので、それを参照のこと。

³ 認知言語学の知見を活用した第二言語としての英語教育の可能性を具体的に論じた著作としては Littlemore（2009）が詳しい。

⁴ 教材においては、その3の用法、すなわち自動詞の用法を一つの用法として、その1およびその2と区別している。

⁵ 英和辞典の記述を学生に見せたのちに与えたテストとこのテストの平行性が保てるように、単語の難易度についても同程度になるように配慮した。

⁶ ここでは、英和辞典の記述を学生に読ませた後を解説前と考えることにする。

参考文献

花崎一夫（2010）「普遍文法（UG）仮説の現在—その功罪を問う—」『信州大学人文社会科学研究』4:127-134

Lakoff, G（1987）『Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal About the Mind』University of Chicago Press, Chicago/ London.

Langacker, Ronald（2008）『Cognitive Grammar A Basic Introduction』Oxford.

Littlemore, Jeannette（2009）『Applying Cognitive Linguistics to Second Language Learning and Teaching』Palgrave MacMillan.

（信州大学 全学教育機構 准教授）

2012年1月4日受理 2012年1月31日採録決定